

第284回くらしの植物苑観察会 2022年11月26日(土)

菊花 江戸時代の観賞—地植え・切花・鉢植え—

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

江戸時代の菊花の観賞法を、地植え、切花、鉢植という3つの視点から見ていく。

1. 地植え

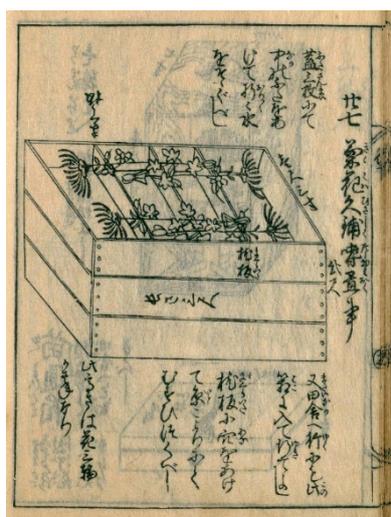


図1 『後の花』正徳3年(1713)刊
国立国会図書館蔵

菊合に出品する切花の保存法を図示。

江戸時代中期の菊の園芸書『後の花』は、菊花壇の設営方法を図入りで細かく説明する。特に注目すべきは、「頃日^{このごろ}は細き木を墨にてぬり」「塩を針かね(金)にぬりて置、^{ろくしやう}緑青を出し」といったように、菊花壇を構成する木を目立たなくするため、墨を塗ったり、針金に塩を塗って錆びさせて緑青を出させたりするなどの工夫が見られる点である。

また切花についても説明があり、「廿七 菊花久舗 嗜置事^{ひさしくだしなみおき}」では、たがいちがい^{ひさしくだしなみおき}に菊花を4本ずつ横に固定してひと箱にしてこれを三重にし、時々水やりをすればよいとしている。しかし、19世紀園芸書にある切花の保持と違い、あくまで目的は一輪で同じ大きさで競う^{まきあわせ}菊合出品にあると考えられる。

2. 切花

江戸時代の園芸書には花壇における菊花の観賞方法が圧倒的に多く登場するが、この菊花壇から花を剪定し、切花として観賞するのも当然のように行われた。嘉永4年(1851)5月刊、水竹(南)亭(中山雄平)著『剪花翁伝』には、品数が多すぎて紹介し切れないとしつつ、他の植物より多くの園芸品種が列挙され、また、挿し芽、菊吸の退治、水上げには切口を焼くとよいなど、具体的な栽培や保持の方法が記されている。文政2年(1819)梅の屋主人著『草木養活秘録』は、花を上向きにするための方法を図示して解説している。

無心花とて^{づの}図こ^{づの}とく下に向、横に成、見苦し。花は直に揉返し挿へし(図2)。

図こ^{づの}とく花真中より茎迄針かねをさし入、花のうち^{みへ}に見^{みへ}さるやうに針かねを剪とり直すへし(図

3)。併是は中菊方は輪大きな花直しやうなり。上向きにするには、針金をもって矯正する方法を示し、中菊より花の大きいものに対して施すものとしている。



図2
下向き・横向きの花



図3
上向きの花

3. 鉢植

菊栽培書『菊花檀養種』(弘化3年・1846刊)の末尾に、菊細工が近年流行したのをきっかけに菊栽培の人口が増えたと述べている。

菊を作りて愛楽しむことは古へより廃する事なけれども近來は菊を以て種々の^{かた}状物に造りて其細工を競ふこと流行して年毎に諸所に多し。然れば草木栽培の業に預らぬ者も秋の楽しみに花壇に菊を造り愛する者多き故に僅に其荒増を誌して好者の一助に備ふるものなり。

天保15年(1844)の番付「巢鴨染井殿中江戸の花独案内」(図4)にも描かれている。さまざま

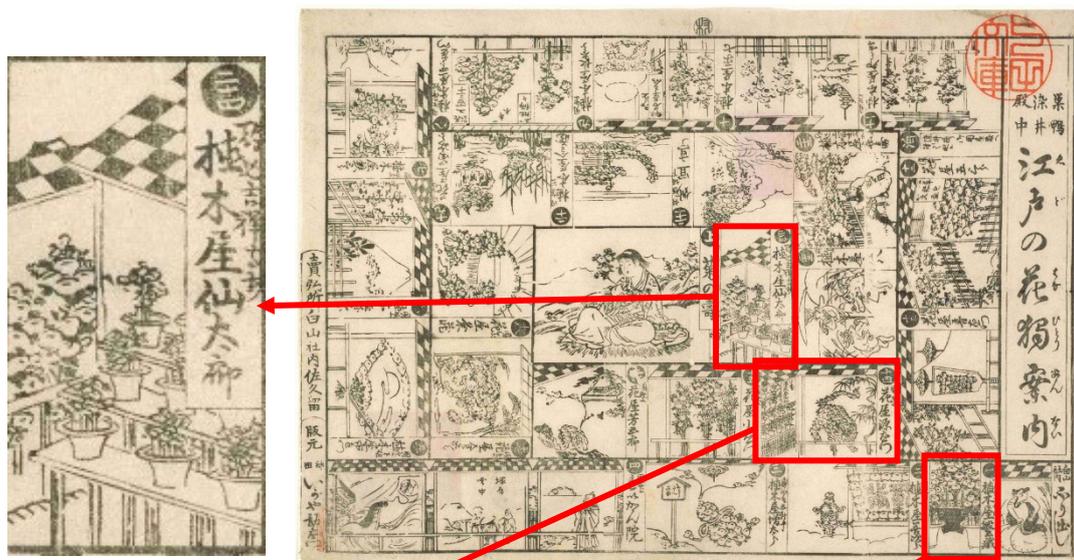
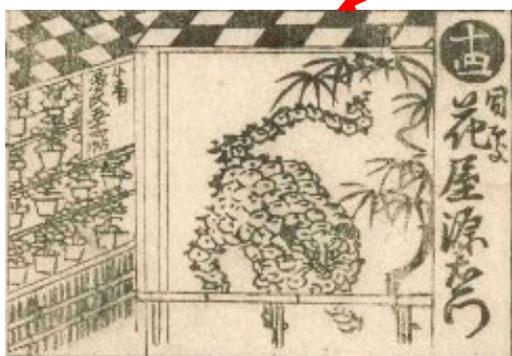


図4 「巢鴨染井殿中江戸の花独案内」 東京都立中央図書館蔵



まな菊細工に混じって、菊の鉢植が描かれているコマがある。菊細工は、植木屋の庭で作られていたが、入場無料であったため、真の目的は鉢植販売にあった。江戸の菊細工は、天保15年から明治時

代まで続けられ、その名産地であった団子坂は明治時代観光名所と化していった。樋口一葉は、明治24年(1891)11月8日の日記によれば、「菊の鉢植をわら縄にて結びて下て来たりし」書生に出会う。おそらく団子坂であろうが、正岡子規が明治29年に「菊畠南の山は上野なり」と詠んだように、上野近くの入谷の植木屋で菊を購入した可能性もある。

.....

次回予告 第285回くらしの植物苑観察会 2022年12月17日(土)

「サザンカの保存と継承」

箱田 直紀氏(恵泉女学園大学名誉教授)

13:30~15:30 くらしの植物苑 東屋 申込不要 定員20名